女子大國文　第百五十一号　平成二十四年九月三十日

『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿

――第六帖（8）蕚～ことなし草――

福田智子

凡例

一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかった歌について注釈を加えるものである。本稿では十二首を収めた。

二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を（　）を付して記す。

三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。

四、本文は、歴史的仮名遣いに統一する。踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を（　）に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のと

おりである。

○永青文庫蔵北岡文庫本　略称（永）
○島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本　略称（松）
○内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本　略称（和）
○内閣文庫蔵林羅山旧蔵本　略称（江）
○神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本　略称（林）
○神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本　略称（宮）
○田林義信氏旧蔵本　略称（田）
○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本　略称（黒）
○寛文九年版本　略称（寛）

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

（永）細川家永青文庫叢刊３『古今和謌六帖（下）』（汲古書院、昭和五十八年一月）所収の影印
（松）島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料
（寛）架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌

集名・部立・歌番号・作者名・詞書）とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

注釈

三八二八（ぬなは）

【本文】

こりずまのこもりえにおふるうきぬなはうき身に物を思ふ比かな

【校異】なし

【語釈】○こりずま　前の失敗にも懲りないさま。性懲りもないこと。　○こもりえ　陸地や河口に深くこもるように入り込んだ入り江。一説に、葦などの生い茂っていて見えない入り江。初句・第二句の句頭は「こ」の同音反復。○うきぬなは　水面に浮いている蓴菜（じゅんさい）。第三句までは序詞。同音で「う（憂）き身」を導く。

【通釈】

性懲りもなく、隠り江に生える水面に浮く蓴菜のように、つらい我が身に物思いをする頃だなあ。

【他出】

『歌枕名寄』巻第十五、四三二二番

籠江

六帖

こりずまのこもり江におふるうきぬなはうき身に物をおもはずもがな

【考察】

「こりずまのこもりえにおふるうきぬなは」から同音反復を用いて「うき身」を導き、人に知られぬ鬱屈した心を抱いて悩むつらい身の上を重ねた歌である。

「こりずまの」という語句は、「こりずまの浦の白浪立ちいでてよるほどもなくかへるばかりか」（後撰集・恋四・八〇〇・よみ人しらず・あだに見え侍りけるをとこに）に見られるように、「浦」と続くのが一般的である。それを、「こもりえ」で承けるところに、当該歌の特色がある。

「こもりえ」は、「三津の崎波をかしこみこもり江の……」（万葉集・巻三・二四九・二五〇・柿本朝臣人麿羇旅歌八首）という歌があるように、『万葉集』から見られる語であるが、八代集には用例は見られない。一方、私家集には、「こもりえのみぎはのしたに今日まつとねざしつもれるあやめぐさかな」（能宣集・二一四・五月五日、さうぶのねにつけて人につかはす）という歌が見える。また、『伊勢物語』に「こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき」（第三十三段・六七・女）がある。他者に知られることのないイメージは、当該歌にも看取されるところである。

「うきぬなは」が同音反復で「うき」に続く例は、「かはかみやあふちのいけのうきぬなはうき事あれやくる人もなき」（好忠集・一〇九・四月中）という歌があるが、一般的には、「なき事をいはれの池のうきぬなはくるしき物は世にこそ有りけれ」（拾遺集・恋二・七〇一・よみ人しらず）に見られるように、「くる」に続く。ここにもまた、当該歌の表現の特徴が見出される。

「うき身」という語は、『万葉集』には用例が見出せないが、勅撰集では『古今集』に、「水のあわのきえてうき身といひながら流れて猶もたのまるるかな」（恋五・七九二・とものり・題しらず）という歌がある。これは恋部の歌だ

が、次の『後撰集』では、「流れての世をもたのまず水のうへのあわにきえぬるうき身とおもへば」（後撰集・雑一・一一一五・大江千里・世中の心にかなはぬなど申しければ、ゆくさきたのもしき身にてかかる事あるまじと人の申し侍りければ）、「世中をいとひがてらにこしかどもうき身ながらの山にぞ有りける」（後撰集・雑三・一二三三・思ふ事侍りけるころ、志賀にまうでて）といったように、雑部に用例が見える。このように、「うき身」は、恋の他、人生一般の思うに任せぬつらさを味わった身の上をいう語であり、当該歌の解釈も、恋の歌としてだけではなく、より広く生きていくことのつらさを嘆く歌とも解釈できる。

「……物を思ふ比かな」という表現は、『古今集』に、「秋ののにみだれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな」（恋二・五八三・つらゆき・題しらず）、「なよ竹のよながきうへにはつしものおきゐて物を思ふころかな」（雑下・九九三・ふぢはらのただふさ・寛平御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に、東宮のさぶらひにてをのこどもさけたうべけるついでによみ侍りける）の二首があるのをはじめ、多数見出される。表現の一類型である。

三八三〇（ねぬなは）

【本文】

くれはつることやおそきとねぬ縄のねぬれば人のくるもしられず

【校異】なし

【語釈】○くれはつる　「くれはつ」は、日がすっかり暮れてしまう意。　○ねぬ縄の　枕詞。同音で「ね（寝）ぬれば」を導く。「ねぬ縄」（根蓴）は蓴菜のこと。　○くるもしられず　「くる」（来る）は、根蓴の縁語。

【通釈】

日が暮れてしまうのを今や遅しと待って、寝てしまうと、(根蓐を「繰る」というが)あの人が「来る」ことにも気づかない。

【他出】なし

【考察】

逢瀬を待ちわびて、やっと日暮れになったものの、すっかり寝入ってしまい、恋人が訪れたことにも気づかないという状況を詠んだ歌であろう。恋人の訪れを待って、そのわずかな気配にも期待するという歌は、たとえば『万葉集』に、「君待つとあが恋ひ居れば我がやどの簾動かし秋の風吹く」(巻四・四九一・四八八・額田王、近江天皇をしのひて作る歌一首)(巻八・一六一〇・一六〇六)といった例があるが、当該歌は、こうした先例を踏まえ、枕詞「ねぬ縄の」やその縁語「くる」といった常套表現を用いながら、伝統的な待つ女の心情からいささか逸脱した、現実感を詠んでいる。

「くれはつ」という語は、「くれはつる年をしみかねうちふさばゆめみむほどに春はきぬべし」(安法法師集・一・正月つごもり春のたつ晦の夜)、「かひなくてとしくれはつるものならばはるにもあはぬみともこそなれ」(蜻蛉日記・二五五・すけ〈道綱〉)といった例のように、年の暮れについていうことが多いが、当該歌では、「くれはてばまたひもみえぬかたいとのあふをばよるとおもふばかりぞ」(躬恒集・二二九・ただみねこたふ)に見える日没についていう。

「……やおそき」という言い回しは、『古今集』に、「はるやとき花やおそきとききわかむ鶯だにもなかずもあるかな」(古今集・春上・一〇・ふぢはらのことなほ・春のはじめによめる)という歌がある他、「花ちるといとひしものを夏衣たつやおそきと風をまつかな」(拾遺集・夏・八二・盛明のみこ・なつのはじめによみ侍りける)といった歌がある。季節の移り変わりについていう例が目立つが、当該歌では日暮れまでの時刻をいい、一日の時間の経過を待ちわびる心情を表す。

「ねぬ縄のねぬ」という形は、『古今集』に、「かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたてじくるないとひそ」（雑体・一〇三六・ただみね）が見出され、また私家集にも、「ねぬなはのねぬなのいたくたちぬればなほおほさはのいけらじやよに」（朝光集・五九・時時かよひ給ふ女、あだにいはるるこそ心うけれ、との給ひければ、女）がある。ただし、これらの例は、いずれも「寝ぬ名」（実際には共寝をしていないのに、あたかも共寝をしたような噂）としており、当該歌の「ねぬれば」とは一線を画す。

結句「くるもしられず」には、後世の例ではあるが、「やどちかきはなたちばなのかになれてわがまついもがくるもしられず」（有房集・九三）という歌がある。「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」（古今集・夏・一三九・よみ人しらず・題しらず）を踏まえた作であることは確かであるが、冒頭に挙げた額田王歌、さらには当該歌の影響下に詠まれたと考えられよう。

三八三三（あさざ）

【本文】

見るからにおもひますだのいけにおふるあさざ（ゝ）のうきてよをばへよとや

【校異】○よをはへよ―よをかへよ（宮）（は朱）

【語釈】○見るからに　「見る」は、恋人に逢う意をも込める。「からに」は、さして重くない原因によって、ある結果がただちに生ずることを示す。……とともに。……と同時に。……や否や。　○ますだのいけ　大和国の歌枕。現在の奈良県橿原市にあったという池の名。「（思いが）増す」の意を掛ける。　○あさざ　ミツガシワ科の水草。　○う

きて　あさざが水面に浮いている様子に、恋人との不安定な関係を重ねる。　○へよとや　「とや」は、格助詞「と」に係助詞「や」が付いたもの。「と」によって示される事柄に対する疑問を表す。……というのか。

【通釈】

あなたに逢うと同時に思いが増す、その（見ると思いが増すという名の）益田の池に生えるあさざが浮かんでいるように、私も不安定な状態でこの世を過ごせというのか。

【他出】

『歌枕名寄』三三二六九番

（益田池　里）

六帖

みるままに思ひます田の池におふるあさくもうきて世をばへよとや

【考察】

恋人に逢うと思いは募るものの、不安定な関係である我が身を、「ますだのいけにおふるあさざ」に喩え、恋人に対してその穏やかならぬ心情を強く訴えた歌である。

「ますだのいけ」は、和歌に用いられる場合、もっぱら「（心情が）増す」との掛詞で用いられる。「おもひ」が「ま（増）す」との掛詞として用いている例には、「おもひのみますだのいけのねぬなはのくるしやかかるこひのみだれよ」（能宣集・二三九・おなじ人のもとに）という歌がある。これに酷似した歌は、『古今六帖』に、「こひをのみますだの池ぬうきぬなはくるにぞもののみだれとはなる」（第三・一六六八・いけ）、「恋をのみますだのいけのねぬなはのくればぞもののみだれともなる」（第六・三八三二・ねぬなは）の二首が見え、当該歌も含めて、十世紀後半における「ますだのいけ」

の歌が、異伝を生み出しながら享受されていたことがわかる。

ただし、「ますだのいけ」には、「ねぬなは」「うきぬなは」が詠まれることが多い。右の『能宣集』や『古今六帖』の例をはじめ、「たちかはります田の池のうきぬなはくれどもたえぬ物にぞ有りける」（人丸集・二七八・山陽道はりま）、「ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞます田のいけるかひなき」（拾遺集・恋四・八九四・よみ人しらず・題しらず）といった例がある。当該歌のように、「あさざ」が詠み込まれる例は、まず見られない。

そもそも、「あさざ」の用例自体が、平安時代以降も稀少である。「かはづなくよしののかはのたきのうへにあさざのはなぞさきてあだなる」（赤人集・一五八・はなをえいず）という歌が見出せるものの、後世には、『新撰六帖』に歌題とともに継承されるのを俟たねばならない。

結句「よをばへよとや」から連想されるのは、後に『百人一首』にも採られた伊勢の「なにはがたみじかきあしのふしのまもあはでこのよをすぐしてよとや」（新古今集・恋一・一〇四九・伊勢・題しらず）であろう。この強い語気は、当該歌にも共通して読み取れよう。

三八三八（うきくさ）

【本文】

こもりえにひまなくうけるうきくさのまなくぞ人は恋しかりける

【校異】　なし

【語釈】○こもりえ　三八二八番［語釈］［考察］参照。　○うきくさ　水面に浮かんで生育する草。根が固定せず、

流れのままに漂うことから、不安定な身の上を重ねる。　○まなくぞ　「間無し」は、絶え間がないさまをいう。浮草の繁茂する空間的広がりと、恋心が継続する時間的広がりとを重ねる。

【通釈】

隠り江に隙間なく浮いている浮き草のように、絶えることなくずっとあの人のことを恋しく思うことだなあ。

【他出】

『夫木和歌抄』巻第二十八、雑歌十、一三五九二番

萍

うき草、六六　　読人しらず

こもりえにひまなくうける浮草のまなくぞ人はこひしかりける

【考察】

三八二八番歌にも用いられた「こもりえ」は、水面が見えない、あるいは見えにくい入り江である。当該歌では、その水面を覆っているものは浮草であり、「まなく」広がる空間を時間的広がりに転じて、恋人をひそかに思う心情を長く持ち続けていることを詠んでいる。

「こもりえにひまなくうけるうきくさ」が歌材として採り上げられる例は珍しく、『新編国歌大観』を検しても、後世の「世をたえて我こもりえのうき草のひまなくうくは涙なりけり」（百首歌合〈建長八［一二五六］年・一四八一・真観）が見出せる程度である。この真観の歌は、あるいは当該歌を念頭に置いて詠作されたものか。

また「ひまな（く）」あるいは「まな（く）」繁る「うきくさ」の例も、当該歌が比較的古い例であり、次いで、「夏ふかみ水だにみえぬうき草のまなくも物をおもふころかな」（定頼集・一五二・四条の宮、つり殿にすみしころ、むか

ひなる女房に）が挙げられる程度である。

ただし、下句については、『万葉集』に、「神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひわたりなむ」（巻十五・三六八一・三六六〇・右一首土師稲足）という歌が見え、また、「かきくもり雨ふる河のささらなみまなくも人のこひらるるかな」（拾遺集・恋五・九五六・人まろ）、「ささのいほにあやめのくさをふきそへてひまなくけふは人ぞこひしき」（道命阿闍梨集・七一・五月五日、やまでらより人のがりやる）といった例がある。比喩として用いられる語が波や菖蒲草という違いはあるが、『万葉集』以来の表現パターンと捉えられよう。

三八四一（つきくさ）

【本文】

むかしよりうちみる人につきくさの花ごころとは君をこそみれ

【校異】○花こゝろとは―花の心とは（田）

【語釈】○むかし　現在から遡っての過去の一時点。以前。かつて。　○うちみる人　「うちみる」は、目に留める、ふと目を向ける意。男女の仲で言う場合には、仮初めに逢瀬をもつ意。「うち」は接頭辞。　○つきくさ　露草の古名。「つき」に（心を）「付き」を掛ける。「付く」は、心や目を向ける、関心を払うの意。　○花ごころ　移りやすい心。浮気な心。

【通釈】

以前から、仮初めに逢う人に心を寄せる、露草のような浮気心を持っている人だと、あなたのことを思っている。

【他出】　なし

【考察】

以前から恋人の浮気性に気づいていたことを詠んだ、女性の立場での歌である。状況によって、相手への非難、自嘲、あるいは諦念が読み取れるであろう。

「うちみる」という語は、和歌においては、「我がやどの冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも」（万葉集・巻八・一六四九・一六四五・巨勢朝臣宿奈麿の雪の歌一首）など『万葉集』から見られる。平安期には、「物ごしに花をうちみて人しれずにびたる心うつろひぬべし」（貫之集・三二五・をむな簀子にさしいりたる桜の花折りたる、馬にのりて道行く法師垣越にうちよりてみる）、「うちみればおもしろきかなはるのよのはなをやはるのかぜはかざしし」（順集・八一）といった例があり、花などを対象とする場合が目に付く。しかし、当該歌のように「人」について用いる和歌の例は珍しく、むしろ、「ただ、あだにうち見る人の、あさはかなる語らひ」（源氏物語・松風）といった物語の例が想起される。

「つきくさ」は、『万葉集』に多く詠まれ、勅撰集における用例は『古今集』から見られる。「いで人は事のみぞよき月草のうつし心はいろことにして」（古今集・恋四・七一一・よみ人しらず・題しらず）など、計二首存する他は、八代集中には、『拾遺集』と『新古今集』に各一首を見出すのみで、用例の出現に時代の傾向が顕著である。

「人に付き（く）」という表現を掛詞として用いた例は、「われといへばあれてぞみゆるはる駒の心は人につきげなれども」（散木奇歌集・一二二六・又同題〈寄馬毛恋〉にて）、「しるらめやこころは人につきくさのそめのみまさるおもひありとは」（続後撰集・恋一・六四八・式子内親王・恋歌中に）といった後世の歌がある程度である。とくに後者の式子内親王は、当該歌と同様、「つきくさ」と掛けるという珍しい例であり、当該歌の影響下に詠まれたものと推察さ

れる。

なお、動詞「つく」が目的語「人に」とともに用いられる場合、さらに目的語「心（を）」を伴う例が散見される。「たよりにもあらぬおもひのあやしきは心を人につくるなりけり」（古今集・恋一・四八〇・もとかた・題しらず／後撰集・恋二・六八七・つらゆき・はつかに人を見てつかはしける）といった勅撰集の例の他、「すき心ひとにつくればあらをだのうちたのむべきなかやまかこは」（相模集・四三一・二月）などの私家集の例もある。

「はなごころ」の勅撰集における例は、『続後撰集』を俟たねばならないが、私家集においては、『元良親王集』に二首、「うぐひすといかでかなかぬふりたててはなごころなるきみをこふとて」（四二）、「ちりぬべきはなごころぞとかつみつつたのみそめけむわれやなになる」（九四・又）という歌が見え、また、「へだてけるけしきをみればやまぶきの花ごころともいひつべきかな」（斎宮女御集・一・ちかきほどにわたらせたまひて、おとづれきこえさせたまはねば、女三宮より）、「はるがすみたなびきわたるけふよりやなべてくさきも花ごころつく」（賀茂保憲女集・二・正月のころほひ、おもひあまりては、ながうたもあるべし）などがある。以上の例は、当該歌と同じく、浮気心の意で用いられる歌が多いが、最後の『賀茂保憲女集』の例は、開花しようとする心をいう。

なお、「つきくさ」の「はなごころ」を詠んだ例には、「うす花心」「ひとはな心」というかたちで詠まれた、「われにのみうつりはつとも月草のうす花心いかがたのまん」（津守集・一〇四・国道・題しらず）、「たのまめや移ひやすき月草のひとはな心色にそむとも」（永享百首・八一〇・持基・寄草恋）という後世の歌がある。当該歌の影響が指摘できよう。

三八四二（つきくさ）

【本文】

月くさのうつろふ色におもひせばいままで君をまたまし物か

【校異】○物か—またましものを（永）物を（松）ものを（江）

【語釈】○おもひせば　「せば」は、過去の助動詞「き」の未然形に接続助詞「ば」の付いたもの。結句の推量の助動詞「まし」と呼応して反実仮想を表す。　○またましものか　「またまし」は第三句「おもひせば」と呼応。「ものか」は反語。

【通釈】

露草の変わりやすい色のように、あなたも心変わりすると思っていたならば、今まであなたを待つでしょうか。いや、決して待たなかったでしょうに。

【他出】なし

【考察】

恋人が浮気性だと知らなかったので、今まで訪れを待ち続けてしまったという歌である。女性の立場からの作であろう。

「月くさ」は、『万葉集』以来、その「うつろふ」色が詠まれてきた。「月草の移ろひやすく思へかもあが思ふ人の言も告げ来ぬ」（万葉集・巻四・五八六・五八三）、「月草に衣色どり摺らめどもうつろふ色と言ふが苦しさ」（同・巻七・一三四三・一三三九）、「月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも」（同・巻七・一三五五・一三五一）の他、「つきくさにそめひとかくぞいろふかくそめつけつればうつろはずといふ」（奈良御集・一二）などが挙げられる。

「おもひせば」という句は、「冬がれののべとわが身を思ひせばもえても春をまたましものを」（古今集・恋五・

七九一・伊勢・物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに野火のもえけるを見てよめる）、「ことのはをなげなるものとおもひせばなにかは人のつらくしもあらん」（兼盛集・五〇・女返しもせざりければ、なげなるものなどいふこともあるものをとて）、「とはぬはしうらむるものと思ひせばいくそたびかはいふべかりける」（小馬命婦集・四四・をとこのとはぬがうらみおこせたれば）、「君をまつわがごとわれを思ひせばいままでここにこざらましやは」（宇津保物語・国ゆづりの中・八四九・みや〈春宮〉）といった十世紀の例があり、男性の訪れ、あるいは男女間の音信が途絶えた時のつらい心情を訴える恋歌に用いられることが多い。

「……ましものか」という言い回しは、『新編国歌大観』を検しても意外と少ない。「はじめより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひにあはましものか」（万葉集・巻四・六二三・六二〇・大伴坂上郎女の怨恨の歌一首并せて短歌）、「おいぬとてなどかわが身をせめぎけむおいずはけふにあはましものか」（古今集・雑上・九〇三・としゆきの朝臣・おなじ御時のうへのさぶらひにてをのこどもにおほみきたまひておほみあそびありけるついでにつかうまつれる）の他、後世の二例を見出すのみである。前者の万葉歌は、当該歌の内容と一脈通じるものがあり、当該歌は、この万葉歌の影響下に詠まれたと考えられる。

三八四八（わすれぐさ）

【本文】

すみのえにおふとぞきき（く）しわすれぐさ人の心にいかでおひけん

【校異】○すみ・え―すみのえ（永）すみの江（松・江・黒・寛）住の江（和・林・宮・田）　○おふとそ―おふとも（そ）（林）

○わすれくさ―恋草（林）　○心に―心の（松）

【語釈】○すみのえ　摂津国の歌枕。忘れ草が生えるといわれる。　○おふとぞききし　「おふ」は生える意。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。　○わすれぐさ　「かんぞう（萱草）」の異名。「萱草、一名忘憂。漢語抄云、和須礼久佐」（『和名抄』）。身に付けると憂さやつらさを忘れるという。

【通釈】

住の江に生えていると聞いた忘れ草は、恋人の心にどうして生えたのだろうか。

【他出】なし

【考察】

本来ならば住江に生えているはずの忘れ草であるのに、どうして恋人の心に生えて、私のことを忘れさせたのだろうかという、切ない恋心を詠んだ歌である。

「すみのえ」は、『万葉集』では、「暇あらば拾ひに行かむすみのえの岸に寄るといふ恋忘れ貝」（巻七・一一五一・一一四七）、「すみのえに行くといふ道に昨日見し恋忘れ貝言にしありけり」（巻七・一一五三・一一四九）といった歌に見えるように、「恋忘れ貝」を拾う場所であった。「わすれぐさ」がこの地に生えるという発想は、ここから生まれたものであろう。

「わすれぐさ」は、『万葉集』に、「忘れ草我が紐に付く時となく思ひ渡れば生けりともなし」（巻十二・三〇七四・三〇六〇）、「忘れ草垣もしみみに植ゑたれどしこのしこ草なほ恋ひにけり」（巻十二・三〇七六・三〇六二）他、計五首の歌が見える。八代集においては、『古今集』に六首、『後撰集』に五首を数え、両集に用例が突出して多い。

「わすれぐさ」が「すみのえ」に生えるという言い伝えは、『古今集』に、「みちしらばつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひわすれぐさ」（墨滅歌・一一一一・つらゆき）という歌があるように、「こひわすれぐさ」のかたちでも、広く知られていたようである。「うちしのびいざすみのえに忘れ草忘れし人の又やつまぬと」（貫之集・七・延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、せじにてこれをたてまつる廿首わすれぐさ）、「住のえのあさみつ塩にみそぎして恋忘れ草つみてかへらん」（貫之集・三七・夏）の他、『土左日記』にも、死んだ女児の母の歌として、「すみの江にふねさしよせよわすれぐさしるしありやとつみてゆくべく」（四七）という歌があり、貫之の作が目立つ。その後も、「わすれぐさおふとしきけばすみのえの松もかひなくおもほゆるかな」（斎宮女御集・九四・おほんかへし）といった例がある。

「人の心」に生えた「わすれ草」も、やはり『古今集』に「忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなむ」（恋五・八〇一・むねゆきの朝臣・題しらず）と詠まれており、当該歌は、この歌の影響下に作られたと見られよう。なお、「すみの江の物とききしをわすれ草うたがひもなきわれにおふらん」（村上天皇御集・八八・さとより忘草を御ふみの中に入れてたてまつり給へりければ）という歌は、「わすれ草」が「すみの江」ではなく「われ」すなわち「人の心」に生えることを詠んだもので、発想が当該歌に通じる。

三八五三（わすれぐさ）

【本文】

わすれぐさたねのかぎりははてなん[ス]人の心にまかせざるべく

【校異】○はてなゝん―はてならん（宮）　○まかせさるへく―まかせさるへき（松・江）まかせさるへき（和・宮）

【語釈】○はてななん　失せる、尽きるの意の動詞「はつ（果つ）」の未然形に完了の助動詞「ぬ」の未然形、希求の助詞「なん」が付いたもの。なくなってしまってほしい。　○人の心にまかせざるべく　「心にまか（任）す」は、思うままにする、勝手気ままにふるまうの意。『万葉集』には見えないが、勅撰集においては『古今集』に用例がある。また、（種を）「蒔かす」を掛ける。

【通釈】

忘れ草の種のすべては、なくなってしまってほしい。恋人が気分次第で、忘れ草の種を蒔くままにさせておかないように。

【他出】なし

【考察】

心変わりするかもしれない恋人が、自分のことを忘れることがないよう、忘れ草の種はすべてこの世からなくなってほしいと詠んだ歌である。『伊勢物語』の「今はとて忘るる草のたねをだに人の心にまかせずもがな」（第二十一段・三九・この女）という歌は、発想・表現ともに共通性が高い。

「わすれぐさ」の「たね」は、『古今集』に、「忘草たねとらましを逢ふ事のいとかくかたき物としりせば」（古今集・恋五・七六五・よみ人しらず・題しらず）、「忘草なにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり」（古今集・恋五・八〇二・そせい法し・寛平御時御屏風に歌かかせ給ひける時、よみてかきける）という二首の歌を見出すが、八代集におけるその後の用例は、「こひわすれぐさ」のかたちで、「すみよしのこひわすれぐさたねたえてなきよにあへるわれぞかなしき」（新古今集・恋五・一四二〇・藤原元真・題しらず）を指摘するのみである。その『新古今集』歌も、十世紀の

歌人の作であり、この頃に比較的好まれた発想であると考えられる。また、歌物語にも、「春ののにおひじとぞおもふわすれ草つらき心のたねしなければ」（大和物語・第十六段・二四・少将）という例がある。

『古今六帖』三八四八番歌にも見られるように、「わすれぐさ」は「人の心」に生える。同歌［考察］にも挙げた「忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなむ」（古今集・恋五・八〇一・むねゆきの朝臣・題しらず）は、霜が置くことにより恋人の心に生えた忘れ草を枯らそうという作である。当該歌は、これをさらに進めて、忘れ草の種そのものをなくしてしまいたいと発想した。また、私よりも先に、恋人が私を忘れてしまったという「わすれ草我が身につまんと思ひしは人の心におふるなりけり」（小町集・七五）という歌もある。

三八五六（しのぶぐさ）

【本文】

こひしともいはでふるやのしのぶぐさしげさまさればいまぞほにいづる

【校異】○いはて―いかて（は(本)）（宮）

【語釈】○いはで　口に出して言わないで。陸奥の地名「岩手」を響かせる。　○ふるや　古家。建ててから年月を経て古くなった家。「古（ふる）」に、年月を過ごす意の「経（ふ）る」を掛ける。三八六〇番［語釈］［考察］参照。○しのぶぐさ　植物名「しのぶ（忍）」に、恋する心情を心の中で我慢する意の「忍ぶ」を掛ける。また、陸奥の地名「信夫」を響かせる。「いはで（言はで・岩手）」と縁語。　○しげさ　形容詞「しげ（繁）し」の語幹に接尾辞「さ」がついて名詞化したもの。忍ぶ草の葉が密生するさまと、我慢している恋心が激しくなるさまを重ねる。　○ほにいづる　「穂

に出づ」は、内面の感情が表に現れ出ることをいう。「しのぶぐさ」が、薄のように穂を出す植物であることからいうか。

【通釈】

恋しいとも言わないで年月を過ごしていると、古い家の忍ぶ草がだんだん繁り、我慢している恋心がだんだん募ってきたので、今こそ顔色に出ることだ。

【他出】

『袋草紙』下巻、八五一番

恋しともいはでふる屋の忍草しげさまさればいまぞほにいづる

『八雲御抄』巻三、一一八番

草部

恋しきをいはでふるやのしのぶ草しげさまさればいまぞほに出づる

【考察】

恋しさを口に出さずに年月を送ってきたが、我慢しきれず、とうとう心情を露わに表に出してしまったという歌である。

「いはでふるやの」という表現は、『新編国歌大観』を検する限り、当該歌が早い例である。「しのぶぐさ」を詠んだ歌も、「みごもりにいはでふるやのしのぶ草しのぶとだにもしらせてしかな」（千載集・恋一・六五五・藤原基俊・権中納言俊忠家の歌合に、恋のうたとてよめる）、「としふれどいはでふるやの忍草いまはほに出でて妻とたのまん」（堀河百首・異伝歌拾遺・四二）、「みごもりにいはでふるやのしのぶぐさしのぶとだにもしらせてしかな」（左近権中将俊忠朝臣家歌合・二五・前兵衛佐基俊・十三番　同〈恋〉　左）、「我が恋はいはでふるやの忍草としに添へても茂りぬるか

な」（民部卿家歌合建久六年〈一一九五〉・二〇九・定経朝臣・十三番　左勝）といった、いずれも後世の例ばかりで、当該歌の影響下に詠まれたと考えられる。なお、「したにのみいはでふるののおもひぐさなびくをばなはほにいづれども」（新勅撰集・恋二・七七六・前中納言国通・題をさぐりて歌よみ侍りけるに、思草をよめる）という歌に見られる「いはでふるののおもひぐさ」は、当該歌から派生した表現であろう。

「しのぶぐさ」は、『万葉集』から詠まれる。「……千鳥鳴く　その佐保川に　石に生ふる　菅の根取りて　しのふ草　祓へてましを　行く水に　みそぎてましを……」（万葉集・巻六・九五三・九四八・四年丁卯の春正月、諸の王・諸の臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に作る歌一首　并せて短歌）という歌からは、穢れを祓うために用いたことが知れるが、実体は未詳といわざるをえない。勅撰集における初出は『古今集』である。「独のみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞおひける」（古今集・恋五・七六九・さだのぶのぼる・題しらず）では、「ふるや」に生える草として詠まれる。当該歌は、この『古今集』歌の影響歌に詠まれたと思しく、同様の例は他に、「なみだのみふるやにおふるしのぶ草ながむるそらのめにさはりつつ」（書陵部蔵〈五一〇・一二〉中務集・二二四・しのぶ草のひさしにあるを、ゐどのはむすめのきみ）などがある。

ところで、これらの「しのぶぐさ」には、「偲ぶ」（昔を思い出して懐かしむ）意が掛けられており、その点で当該歌とは異なる。「偲ぶ」意の「しのぶぐさ」の例は枚挙に暇がないが、その一方で、我慢する意の例もあり、当該歌のように「いはで」とともに詠まれた歌も、『一条摂政御集』に二首、「こひしきを人にはいはでしのぶぐさしのぶにあまるいろを見よかし」（一一二二・しのぶぐさのもみぢしたるをふえにいれたまへる）、「いはでおもふほどにあまらばしのぶぐさいとどひさしのつゆやしげらむ」（一二三・返し）という贈答歌が見出せる。また、同集には、他にも、「しのぶぐさ」をめぐる贈答歌、「ふゆさむみねさへかれにししのぶぐさもゆるはるべは我のみぞしる」（一四七・いとほ

どへてしのぶぐさのかれたるにさして、おとど）、「もえいでむはるをまつとてしのぶぐさゆきのしたにもねやはかれする」（一四八・返し）があり、我慢する意の「忍ぶ」の掛詞である。同様の例は、『朝光集』にも、「しのぶぐさしのぶかひなくもてなさばしのぶることももらばいかにぞ」（七五・いかなる事のあるにか有りけん、ひとかはりなどしければ）、「おふとだに見ざりしものをしのぶぐさもらすばかりのつゆやおきけん」（七六・かへし）の贈答があり、この用法が、主として贈答歌に見られる点に注意しておきたい。なお、以上の私家集の詞書から、平安中期においては、実体としての「しのぶ草」が歌人たちの身近にあり、作歌の素材となっていたことが知られる。

「しげさまさ（る）」という表現を用いた歌としては、まず『古今集』の「わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき」（恋二・五六〇・をののよしき）が挙げられるであろう。他にも、「うきことのしげさまさればなつ山のしたゆくみづのおともかよはず」（敦忠集・二六・人にいひうとまれてかへりごとせぬ人に）、「年をへてしげさまされば宮まぎの千世をへつつもこられてしかな」（高光集・二一・御かへし）といった例がある。

「しのぶぐさ」が「ほにいづ（る）」のを詠んだ歌は、今のところ管見に入らない。「花すすきほにいづる事もなきやどは昔忍ぶの草をこそ見れ」（後撰集・秋中・二八八・中宮宣旨・ひとのもとに、をばなのいとたかきをつかはしたりければ、返事にしのぶぐさをくはへて）という歌はあるが、「ほにいづる」のは「花すすき」であり、「しのぶぐさ」ではない。

三八五八（ことなしぐさ）

【本文】

くりこまのまつにはいとど年ふればことなしぐさぞおひそはりける

【校異】○くりこまのまつ―こりすまのまつ（松・江）こりすまのまへ（和・林・宮）こり□まの松（田）こりつまの松（黒）こりすまの松（寛）　○年ふれは―年ふれと（松・黒）としふれと（江・寛）

【語釈】○くりこまのまつ　「くりこま」は、京都府宇治の南、「栗隈　久里久末」（『和名抄』六、山城国、久世郡）の地を指すと見られる。京都と奈良を往還する際の通り道にあたり、古くから狩猟地であった。「まつ」は「松」に「待つ」を掛ける。　○ことなしぐさ　植物「しのぶ」の異名とも言われるが未詳。木下華子氏「歌語の輪郭―『ことなし草』をめぐって―」（「東京大学国文学論集」第一号、二〇〇六年五月）では、①何事も無い「事無し／言無し」、②成就を意味する「事成し／言成し」、③「ことなし」の言葉続きを活かして「（…する）事が無い」の掛詞を作る「事無し」というバリエーションが、『古今六帖』所載歌に見出せることを指摘している。当該歌は①の意で、「言無し」（音信がない）あるいは「事無し」（逢瀬がない）の意を掛ける。　○おひそはりける　「おひそふ」は、生長するにつれて生い茂る意。

【通釈】

栗駒の松のように、（恋人を）待つにしては、一段と長い年月を過ごしたので、「こと無し草」が生い茂り、恋人から音沙汰もないことだ。

【他出】

『夫木和歌抄』巻第二十雑部二、八五七五番

題不知、懐中　　読人不知

くり駒の松にはいとど年ふれどことなし草ぞおひそめにける

『歌枕名寄』巻第二十七、七〇三八番

（栗駒山）

同（六帖）　松　事無草

栗こまのまつにはいとど年ふれどことなし草ぞおひそはりける

『歌枕名寄』巻第二十八、七一三一番

（武隈）

六帖　事無草

たけくまの松にはいとどとしふれどことなしぐさぞおひそはりける

【考察】

地名「くりこま」の和歌の用例は、『新編国歌大観』を検しても、『古今六帖』と『夫木抄』『大和物語』『歌枕名寄』、そしてわずかの私家集にしか見出すことができない。しかも、「くりこま（の）山」の例がほとんどを占める。「御かりするくりこま山のしかよりもひとりぬる夜はかなしかりけり」（夫木抄・巻十二・四六〇一・読人不知・貫之家歌合）は、比較的詠作年次の古い例であろう。この歌は、下句「ひとりぬる身ぞわびしかりける」のかたちで、『元良親王集』（一一二・かくておはしてのち、うちへ返しになむどのたまへれば、女）、『大和物語』（第百四十段・二二一・昇の大納言のむすめ・また、「宇治へ狩しになむいく」とのたまひける御返しに）にも載る。『大和物語』には他にも、「くりこまのやまにあさたつきじよりもかりにはあはじとおもひしものを」（第八十二段・一一六）という右近の歌があり、また、「もみぢするくりこまやまのゆふかげをいざわがやどにうつしもたらむ」（能宣集・二三四・くりこまやまなる人のいへに、女どももみぢ見はべり）といった歌が、『古今六帖』成立時に近い作として挙げられよう。『古今六帖』には他にも、「く

りこまの山にあさたつきじよりもわれをばかりにおもひけるかな」（第二・一一八八・きじ）という歌があるが、先の『大和物語』の右近歌と上句が全く一致しており、かなり固定化した表現類型が存することがわかる。

「くりこま」の「松」が詠まれるごく稀な例として、「たけくまにいづれたがへりくりこまのみあけのまへに松たてるをか」（夫木抄・一三七九五・藤原長能・家集・くりこまのみあけと云ふ所に一本の松あり、山のくちに田ある所をよめると云云）が挙げられる。増田繁夫氏「藤原長能とその家集」（平安文学輪読会『長能集注釈』、塙書房、平成元年二月）では、この『夫木抄』歌の「くりこまのみあけ」を、「くりこまのみやけ」、すなわち、道綱母が初瀬詣での帰り道に宿泊した「山城の国、久世の三宅といふところ」（『蜻蛉日記』上巻）と想定している。

もっともこの『夫木抄』歌は、『長能集』所収本文と比較すると、歌句に大きな異文がある。また、『長能集』では一連の歌群中の一首であり、その位置付けから、詠歌状況も異なると考えられる。この点について、増田氏は、『夫木抄』の本文が、都人に知られた地名に誤写あるいは改変された可能性を指摘する。

当該歌の場合も、「くりこま」には諸本間で異文が多いが、この本文を採るとすれば、先の『夫木抄』長能歌に詠まれた同地を指し、そこに松が生えていたことを示す例に加え得るであろう。ただし、多くの異文が生じていることから推すと、伝本の書写過程において「くりこまのまつ」が必ずしもなじみのある景物であったとは言い難い。なお、異文「こりずまのまつ」に拠れば、「性懲りもなく（恋人を）待つ」意となる。歌意はとりやすいが、当該歌の本来の本文とは考えにくいであろう。

「ことなしぐさ」の八代集における用例は、『後撰集』に二首、「つまにおふることなしぐさを見るからにたのむ心ぞかずまさりける」（恋二・六九七・源もろあきらの朝臣・人のもとにはじめてふみつかはしたりけるに、返事はなくてただかみをひきむすびてかへしたりければ）、「かざすともたちとたちなんなきなをば事なし草のかひやなからん」（雑

三・一二二〇・つらゆき・しぞくに侍りける女の、をとこになたちて、かかる事なむある、人にいひさわげといひ侍りければ）が見えるのみである。勅撰集全体に視野を広げても、「きみみずてほどのふるやのひさしにはあふことなしのくさぞおひける」（新勅撰集・恋五・九四五・よみびとしらず・題しらず）という一首を加えるに過ぎない。私家集においても、平安期の例は、「なほあらじことなしぐさにいふことをききてしあらばうれしからまし」（人丸集・二五）、「おほかたのあきこそのべをわかるともことなしぐさはたたじきぎすを」（小馬命婦集・二〇・返し）、「とこ夏のにはにたてればにはのおもにことなしぐさをさへおほしたるかな」（嘉言集・一六六・まへのにはのとこ夏をもてあそぶ）といった例を見出すのみで、十世紀後半を中心とする用例が目立つ。

三八五九（ことなしぐさ）

【本文】　つらゆき

人にのみいはれのいけのあやなくはことなしぐさのやどにさそはん

【校異】○あやなくは―あやなくに（松・和・江・林・宮・田・黒・寛）

【語釈】○いはれのいけ　奈良時代、奈良県桜井市池之内付近に造られたと伝えられる池。地名「いはれ（磐余）」に「言はれ」を掛ける。　○あやなくは　「あやなし」は、そういういわれがない、根拠がないの意。ここでは、男女の関係についていう。　○ことなしぐさ　「言成し」（やかましく取りざたする）を響かせながら、「事成し」（物事を成就させる）を掛ける。ここでは、逢瀬をもつことを指す。

【通釈】

「磐余の池」の名のように、人に（男女の仲を）噂されてばかりいるのが、いわれのないことならば、「事成し草」の生える家に誘って、その草の名のとおり、逢瀬をもってしまおう。

【他出】

『歌枕名寄』巻第十一、三一四二番

六帖　事無草

ひとりのみいはれの池のあやにくにことなし草の宿へさそはん

【考察】

「いはれのいけ」の歌は、夙に『日本書紀』『万葉集』に見えるが、「磐余」に「言はれ」を掛けるのは、当該歌が早い例であり、『古今六帖』には他にも、「あだなりとなにはいはれの池なれば人にねぬなはたつにざりける」（第三・一六七〇・いけ）という出典未詳歌がある。また、「なき事をいはれの池のうきぬなはくるしき物は世にこそ有りけれ」（拾遺集・恋一・七〇一・よみ人しらず・題しらず）も、ほぼ同時代の歌として挙げられるであろう。

結句「やどにさそはん」について、木下華子氏前掲論文は、『伊勢集』の「をとこのゆきあひつつ物いひけるゑなむありけるむめのはなのたよりに物いひそめたるをんなに、をとこ」という詞書の贈答歌中の一首、「わがやどにいざさそはれよさくらばな〔　〕山ざとにかくれてかさく」（伊勢集・三六・桜花のさかりに、おなじをとこ）を引き、「男が女に対して」「戯れ掛ける体のものではないだろうか」とする。「さそふ」という語の用例には、有名な「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（古今集・雑下・九三八・小野小町・文屋のやすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる）という歌もあり、当該歌にもその意味を読み取れよう。

三八六〇（ことなしぐさ）

【本文】

君みてしほどのふるやのひさしにはあふことなしのくさぞ生ひける

【校異】○君―恋（和）

【語釈】○ほどのふるや　「程経る」と「古屋」とを掛ける。三八五六番［語釈］［通釈］参照。　○ひさし　庇。「久し」を掛ける。　○あふことなしのくさ　「逢ふ事無し」と「事無し草」とを掛ける。

【通釈】

あなたに逢った時から長い年月が経ち、古びた家の庇には、久しく逢うことがないという名の「事無し草」が生えたことだ。

【他出】

『新勅撰和歌集』巻第十五、恋歌五、九四五番

題しらず　（よみびとしらず）

きみみずてほどのふるやのひさしにはあふことなしのくさぞおひける

【考察】

「ふるや」の「ひさし」に生える「ことなしのくさ」を、掛詞として連続して用い、恋人と逢ってから長い年月が経ってしまった感慨を詠んだ歌である。

「君みてしほどのふるや」のイメージは、「おとづれてほどふるやどのほととぎすなくひとこゑのめづらしきかな」（元良親王集・九〇・ただしばしにてたえ給ひにける人に、ほどへて御文つかはしたりければ）の「おとづれてほどふるやど」

と重なる。右の歌は男性からの詠であるが、当該歌は女性の立場から詠んだのであろう。

前出の『古今六帖』三八五六番でも触れたように、「ふるや」には「しのぶぐさ」が生えると詠んだ例が多い。「（あふ）ことなしのくさ」あるいは「ことなしぐさ」の歌は、『新編国歌大観』を検しても、当該歌以外に見られない。

また、「ひさし」に生えるのも、「いはでおもふほどにあまらばしのぶぐさいとどひさしのつゆやしげらむ」（一条摂政御集・一二三・返し）という歌に見られるように、「しのぶぐさ」である。

「ふるや」と「ひさし」とを詠み込んだ歌は、当該歌が早い例であり、他には後世の「あふことはなからふるやのいたびさしさすがにかけてとしのへぬらん」（金葉集二度本・恋下・五〇四・題読人不知）、「いかにしてよにもふるやのいたびさしくちぬなげきの猶のこるらん」（如願法師集・八六〇・和歌所御歌合に、述懐こころを）といった歌がある。

「あふことな（し）」の例は、八代集においては、「かねてより風にさきだつ浪なれや逢ふ事なきにまだき立つらむ」（古今集・恋三・六二七・よみ人しらず・題しらず）の他、『後撰集』に二例、「名のみして逢ふ事浪のしげきまにいつかたまもをあまはかづかん」（恋三・七七三・よみ人しらず・返し）、「よるしほのみちくるそらもおもほえずあふこと浪に帰ると思へば」（恋五・九六五・よみ人しらず・人のもとにまかりけるを、あはでのみ返し侍りければ、みちよりいひつかはしける）を見出す。『後撰集』の例は、いずれも「あふことなみ」で、「無み」と「波」の掛詞になっており、同様の例は私家集に、「あしがきのなかによのはのあぢきなさあふことなみによらばぬれつつ」（賀茂保憲女集・一五四）という歌がある。当該歌のように、草の名と掛ける例は、『新編国歌大観』を検しても、「わが宿のしげる草葉の中にだにあふことなしの名こそつらけれ」（新撰六帖・第六・二〇七二・為家・ことなし草）という六帖題和歌が見られる程度である。

附記

本稿は、京都女子大学において、非常勤講師として担当した平成二十三年度「講読中古A」「講読中古B」の授業内容の一部であり、また、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」（課題番号22500236、平成二十二～二十四年度）における研究の一部である。

三八二八・三八三〇・三八五三・三八五八・三八五九・三八六〇番歌を福田が執筆し、その他は、「講読中古A」「講読中古B」受講生のうち、杉本千明（三八三三番）、久保綾香（三八三八番）、鈴木香里（三八四一・三八四八番）、丸井しずか（三八四二番）、中山陽加（三八五六番）のレポートをもとに、福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.2.00を使用した。

なお、本稿は、これまで「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（1）春草～冬草―」、「同―第六帖（2）下草～雑の草―」、「同―第六帖（3）山吹・撫子・秋萩―」、「同―第六帖（4）薄・篠薄・荻・蘭―」、「同―第六帖（5）菊～紫苑―」として、「文化情報学」（同志社大学文化情報学会）第四巻第一号（平成二十一年三月）、第七巻第一号（平成二十三年十月）、第五巻第一号（平成二十二年三月）、第六巻第一号（平成二十三年三月）、および第七巻第二号（平成二十四年三月）に掲載されたシリーズの一部である。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館嶋原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

〈附録〉『古今和歌六帖』別出歌一覧—第六帖（8）蕚～言なし草—

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（　）を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立を十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一巻　1古今和歌集～4後拾遺和歌集

第二巻　1万葉集～6和漢朗詠集

第三巻　1人丸集～81赤染衛門集

第五巻　1民部卿家歌合～61源大納言家歌合長久二年、253紀師匠曲水宴和歌～269九品和歌、281歌経標式（真本）～285新撰髄脳、290新撰和歌髄脳、347古事記～353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記～393和泉式部日記、414竹取物語～420落窪物語

第六巻　2秋萩集～5麗花集

第七巻　1奈良帝御集～36肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数—通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉3—19貫之355『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異同のある場合は、句ごとに［　］を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

ぬなは

3827 我が心ゆたのたゆたにうきぬなはへにもおきにもよりやかねまし（人丸）

3-1人丸29［成りにけるかな］、2-1万葉1356［ゆたにたゆたに］［よりかつましじ］

3828 こりずまのこもりえにおふるうきぬなはうき身に物を思ふ比かな

〈未詳〉

ねぬなは

3829 かくれぬのそこよりおふるねぬなはのねぬなはたてじくるないとひそ（ただみね）

7-6忠岑48、3-13忠岑68［ねぬなはたたじ］、1-1古今1036［したよりおふる］

3830 くれはつることやおそきとねぬ縄のねぬれば人のくるもしられず

〈未詳〉

3831 やま水にきみはおひねどねぬなはのくるまにまにも思ひますかな

『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿

3832 5-417平中146［ぬまみづに］［かるこもの］［めに見す見すも］［おひまさるかな］、5-416大和299［ぬま水に］［きみはあらねど］［かかるもの］［みるまみるまに］［おひまさりけり］

恋をのみますだのいけのねぬなはのくればぞもののみだれともなる

3-33能宣239［おもひのみ］［くるしやかかる］［こひのみだれよ］

あさざ

3833 見るからにおもひますだのいけにおふるあさざのうきてよをばへよとや

〈未詳〉

うきくさ

3834 ときぎぬのおもひみだれてうきくさのうきても我はありわたるかな（人丸）

2-1万葉2509［こひみだれつつ］［うきまなご］［いきてもわれは］［ありわたるかも］

3835 ねを絶えて水にうかべるうきくさは池のふかきをたのむなるべし（伊勢）

3-15伊勢集78［みづにとまれる］［いけのふかさを］［たのむなりけり］

3836 わびぬれば身をうきくさの根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ（こまち）

1-1古今938、2-3新撰和247、3-5小町38

3837 水の面におふる五月のうきくさのなみの上にやたねをまきけん（みつね）

7-5躬恒83［水にのみ］［うき草は］、3-12躬恒29［おひてわたれる］［うきくさは］［たねをまくらむ］

3838 こもりえにひまなくうけるうきくさのまなくぞ人は恋しかりける

〈未詳〉

つきくさ

3839 つきくさにころもはすらん朝つゆにぬれての色はうつろひぬとも

1-1古今 247 [ぬれてののちは]、1-3拾遺集 [ぬれてののちは]、2-1万葉 1355 [ぬれてののちは]、3-1人丸 28 [ぬれてののちは]

3840 月くさのいたづらにあるこころかな我がおもふ人のこともつげこぬ

2-1万葉 586 [うつろひやすく] [おもへかも]

3841 むかしよりうちみる人につきくさの花ごころとは君をこそみれ

〈未詳〉

3842 月くさのうつろふ色におもひせばいままで君をまたましものか

〈未詳〉

3843 つきくさにころもいろどりすらずともうつろふ色と聞くがくるしさ

2-1万葉 1343 [すらめども] [いふがくるしさ]

3844 世の中の人の心はつきくさのうつろひやすき色にぞ有りける

1-1古今 795 [花ぞめの]

3845 つとにさきゆふべはきゆるつきくさのけぬべきこひも我はするかな

『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿

3846
2-1万葉 2295 [あしたさき] [ゆふへはけぬる] [あれはするかも]
あさ夕にさきすさびたる月草のひくたへともにけぬべく覚ゆ
2-1万葉 2285 [あさつゆに] [ひくたつなへに] [けぬべくおもほゆ]

わすれぐさ

3847
道しらばつみにもゆかんすみのえのきしにおふてふこひわすれぐさ（つらゆき）
1-1古今 1111、2-3新撰和 340

3848
すみのえにおふとぞききしわすれぐさ人の心にいかでおひけん

〈未詳〉

3849
すみのえにふねさしよせよわすれぐさしるしありやとつみに行くべく（つらゆき）
5-389土左記 47 [つみてゆくべく]

3850
うちしのびいざすみのえへわすれぐさわすれて人のまたやつまぬと（おなじ人）
7-7貫之 5、1-3拾遺集 466 [いざすみの江の]、3-19貫之 7 [いざすみのえに] [忘れし人の]

3851
すみよしとあまはいふともながゐすな人わすれぐさきしにおふてふ（みつね）
7-6忠岑 75、2-3新撰和 299 [おふといふなり]、3-13忠岑 161 [おふといふなり]、
1-1古今 917 [あまはつぐとも] [おふといふなり]

3852
我がためはみるかひもなしわすれぐさわするばかりのこひにしあらねば（はつせの中納言）
1-2後撰 789

3853 わすれぐさたねのかぎりははてななん人の心にまかせざるべく

〈未詳〉

しのぶぐさ

3854 ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶのくさぞ生ひける

1-1古今769

3855 花すすきほにいでほにいでずなきやどはむかししのぶのくさをこそみれ（伊勢）

3-15伊勢集247［ほにもいでてし］、1-2後撰288［ほにいづる事も］

3856 こひしともいはでふるやのしのぶぐさしげさまさればいまぞほにいづる

〈未詳〉

3857 山たかみ峰のあらしのふくさとはにほひもあへずはなぞちりける（つらゆき）

1-1古今446［つねに嵐の］

ことなしぐさ

3858 くりこまのまつにはいとど年ふればことなしぐさぞおひそはりける

〈未詳〉

3859 人にのみいはれのいけのあやなくはことなしぐさのやどにさそはん（つらゆき）

〈未詳〉

『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿

3860

君みてしほどのふるやのひさしにはあふことなしのくさぞ生ひける

〈未詳〉

（本学非常勤講師・同志社大学文化情報学部准教授）